

7月14日「すべての人に」使徒11:4~18、ルカ17:11~19

ペンテコステの日、使徒たちに聖霊が注がれ、最初の教会が始まってから驚くべきことの連続でした。異教の地だと思われていたサマリアでは大勢の人々がイエス様を信じるようになり、先週は遠くエチオピアの高官が初めての異邦人キリスト者となった物語を聞きました。なんとと言っても一番の驚きは、キリスト者を捕らえ、イエスを憎んでいたサウロが、私たちの兄弟、宣教者パウロへと変えられたことでしょう。そして、カイサリアではイエス様を十字架につけたローマ軍の100人隊長コルネリウスとその家族が悔い改め、ペトロからバプテスマを受けました。聖霊の働きは最初の教会の想像をはるかに超えて様々な人を主の道へと導いていったのです。

ところが、聖霊の働きはあまりにも人々の想像を超えすぎていました。エルサレムに残っていた使徒たちに異邦人が洗礼を授けられ、教会のメンバーとなったことが知れ渡ると、大きな混乱が起きたのです！教会のメンバーとなったからには、共に主の食卓に与ることになります。けれども、当時のユダヤ人たちは異邦人と共に食事することを忌み嫌いました。異邦人の罪を共に負うことになると考えたからです！今の私たちならば「ご飯くらい一緒に食べればいいじゃないか？心を広く持とうよ」などと思われるかもしれませんが、それは信教の自由が確立された私たちだから言えることです。当時のユダヤ人たちは周囲の人たちとの軋轢にも関わらず、皇帝崇拜を拒否し、安息日を守り、外国人との結婚を避けました。そうしなければ、自分たちのアイデンティティを保つことが出来なかったのです。今も、たとえば宗教的に大きな制約を受けている中国のクリスチャンたちは命懸けで信仰を守ります。

少し話が変わりますが、宗教について食物規定が話題になると思います。私が以前住んでいた神戸は世界的にも珍しい宗教的に多様な町で、イスラムのモスク、ユダヤ教のシナゴグ、インドのジャイナ教やシク教の寺院など色々な宗教施設がありました。私は勉強のために教会の中高生を連れてそのような施設を周ったこともありました。港町として早くから開かれ、外国との交易の拠点となっていたからでしょう。多度津にも最近是中国物産展が出来ていますが、イスラム寺院の近くにはイスラム教の人たち向けの雑貨屋があり、ユダヤ人の人たちが住んでいるエリアにはその人たち向けの雑貨屋があります。そこには「コーシェル」という認可を受けた肉が売られています。コーシェルとは律法の規定を守っている肉のことです。律法（レビ記11章）によれば、ひづめが割れていて反芻する草食動物でしか食べてはならないことになっています。たとえば、たぬき、うさぎは反芻するがひづめが割れていないからダメ、いのしし（豚）はひづめ

は割れているが反芻しないからダメです。食べられるのは牛や羊、鳥などになります。また、締め方の手順も厳格に決められていて、最も生き物が苦しまないようにするのが基本です。この食べ物の規定については後に使徒言行録 15 章で再度、異邦人のキリスト者が最低限守るべき律法として話題に上ることになります。

今もそうですが、基本的にユダヤ教にとっては神を信じること＝律法を守ることなのでその遵守は絶対です。イエスを救い主だと信じるようになった最初の教会にとっても律法の遵守の問題は後にも尾を引く、重要な問題だったのです。さて、異邦人との食事について非難されたペトロは釈明に追われます。それが、今日のところです。ペトロは自身が見た幻の話をしします。

「大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、天からわたしのところまで下りて来たのです。その中をよく見ると、地上の獣、野獣、這うもの、空の鳥などが入っていました。そして、『ペトロよ、身を起こし、屠って食べなさい』と言う声を聞きましたが、わたしは言いました。『主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は口にすることがありません。』すると、『神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない』と、再び天から声が返って来ました。」

神が清めたものを清くないと言ってはならない・・・この幻によってペトロは神さまが清いとされた異邦人が教会のメンバーとなることを拒んではならないことに気付きました。そして、ローマ 100 人隊長コルネリウスとその家族に洗礼を授けたのです。ペトロは言います。「わたしたちに与えてくださったのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになったのなら、わたしのような者が、神がそうなさるのをどうして妨げることができたでしょうか。」そうなんです。コルネリウスが悔い改め、イエス様を信じて生きる道へと招かれたのは、神さまご自身の働きなのです。決してペトロが努力したからでも、コルネリウスが真面目だったからでもありません。神がコルネリウスを選び、招かれたのです！それは人間の力を越えた大きな導きによるものだったのです。この言葉に、人々は静まり返りました。「それでは、神は異邦人をも悔い改めさせ、命を与えてくださったのだ」そう言って、神を賛美したのです。

今を生きる私たちにも、到底、神さまの救いの計画に入れられていると思えない人がその計画に入っていることがないのでしょうか？私の卒業した関西学院大学の神学部は牧師を目指すコースとキリスト教を思想文化として学ぶコースの二つに分かれていて、クリスチャンでなくとも入学できます。私は思想文化を学ぶコースに入学しながら途中

で牧師を志してそちらにコース替えをしました。同じように、全くキリスト教を知らずに入学してそこで出会ってクリスチャンとなる人もいます。当然、逆もあって授業でキリスト教に触れながらも4年間で一度も教会に行くことのない学生も一定数います。私の後輩にもちょっとチャラくて「キリスト教を学ぶより彼女を作って遊ぶことの方が大事だ」と公言していて、きっと教会とは縁のない生活を送るのだろうと思う人がいました。ところが、ちょうど昨年、恩師の榎本てる子先生の葬儀に行った際に、その後輩と偶然出会い話す機会がありました。彼は卒業後、色々なことがあったようで、榎本先生の元に戻り、一緒に過ごす中で考えが変えられ、最近では、教会に通い、聖書を読み、生き方について真剣に考えているらしいのです。私は人間がここまで変えられるのかと驚きました。見た目の先入観で人を裁いたり、判断したりしない方が良いことをわたしに教えてくれた出来事でした。先日NHKの「逆転人生」という番組でも元暴力団員だった人が悔い改め牧師となった話をしていました。彼は今、牧師をしながら薬物依存の方や元受刑者の社会復帰の手助けをしているらしいのです。

私たちは悔い改めをどのようなものだと思っているのでしょうか？個人がキリストに向かう輝かしい一歩だったり、犯した罪への後悔の気持ちのことだと思っていないでしょうか？今日の物語はそうではないことを伝えています。ペトロは言います。「わたしたちに与えてくださったのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになったのなら、わたしのような者が、神がそうなざるのをどうして妨げることができたのでしょうか。」悔い改めとは神さまが私たちに与えてくださる賜物なのです！「**それでは、神は異邦人をも悔い改めさせ、命を与えてくださったのだ**」悔い改めとは神さまが私たちに与えてくださる命なのです！賜物や命は自分の能力や努力で勝ち取るものでは決してありません。自分の限界を大きく越えて与えられる神の力なのです！

さて、この悔い改めは誰に起こるのでしょうか？もちろんコルネリウス個人にも起こります。けれども、悔い改めは同時進行的にペトロに起こります。彼は幻を通して気づきます。神さまは異邦人もその救いの計画に組み込まれていること。今日ご一緒に読んだ福音書によれば、それはイエス様にとっても大きな驚きでした！重い皮膚病の癒しに感謝したのは異教徒のサマリア人だけだったのです。ペトロは幻を通して神の恵みの偉大さに気づき、悔い改めます。そしてその悔い改めは教会共同体全体に広がっていきます。そうなんです。悔い改めは「共同体」に起こるのです。キリストに向かいたいと思った方を（もしくはその過程の方を）個人や教会が受け止めるところから始まるのです。先ほど、例に挙げた二人も、大学の後輩は榎本てる子先生と言う個人を通して、元

暴力団の方もどのような背景であっても牧師としてたてる覚悟を決めた教会を通して受け入れられたのです！

私たちは自分たちが既に救われた者だと、もう大丈夫だと安易に考え、悔い改めの必要など無いように思ったりしていないでしょうか？よく『祈ろう四国教区の教会』を読んでいても「救われる魂が起こされますように」とか「教会に加えられる人が与えられますように」という祈りは聴きます。人の祈りにいちゃもんをつけるようですが、そうやって暗に他者に悔い改めを強要しているのです。一方で、私たち自身が「悔い改めを与えてください」と祈ることは非常に少ないように思います。それではダメなのです！私たちは「私たちに悔い改めを与えてください」と祈らなければなりません。「私たちにすべての人を受け入れる愛をください」と祈らなければならないのです。悔い改めは同時進行的に共同体にも起こります。そうでなければ本当の悔い改めではないのです。私たち共同体が真理に向かって変えられることが悔い改めなのです。私たち洗礼を受けたからもう大丈夫！ではなくて、洗礼を受けたからこそ主に向かって悔い改め続ける共同体でなければならないのです！

今日の福音書の物語は本当に面白いと思います。10人の人を癒したのに帰ってきて感謝を述べたのはサマリア人だけでした。イエス様はそのことに大変驚かれます。この後、もしかしたらイエス様も悔い改めて祈ったのではないのでしょうか？「サマリア人に期待しなかった私をお許しください」「神の恵みの大きさを侮った私を赦して下さい」と。最初の教会は、あらゆるところで福音を宣べ伝える度に、ありとあらゆる人たちに福音が届けられることを驚き、文化や習慣の違いと出くわすたびに悔い改めながら歩んで行きました。だってそうでしょう？ついこの間まで仲間たちを牢屋にぶち込んでいたパウロを仲間として受け入れることなんてそう簡単には出来なかったはずです。ついこないだまで仲たがいしていたサマリア人たちと一緒に食事をするなんて難しかったはずです。でもその度に少しずつ神さまの方へと変えられながら、教会はすべての人に福音を伝えようと世界へと出て行ったのです。私たちもこの教会に倣いたいと思うのです。